

## 「のれんの町勝山」調査団報告書



■2009年9月12日

■参加者10名:石井、池端、神沢、北川、鈴木、橋、寺井、奈良平、野々口、坂東

6月の五個荘見学と講演会「暖簾考」に引き続き、「のれんの町勝山」調査団として、岡山県真庭市勝山を訪れました。朝7時半大阪駅を出発、高速バスにて津山へ、津山から電車で11時に中国勝山駅に到着しました。駅舎の正面では、早速絞りの美しい暖簾が出迎えてくれました。勝山は江戸時代には勝山藩二万三千石の城下町で、出雲街道の要衝であり、中心を流れる旭川は水運の最上流発着地点として古くから栄え、今も自然環境豊かな文化の香り高いところでした。

調査の目的は、勝山は暖簾が町のシンボルになっていることに興味を持ち、暖簾による町おこしの企画が計画され実行されていった経緯、町おこしに暖簾が果たした役割、今後の展望等を調査し、暖簾展や「布の力」の企画へ向けての参考例として調査することになりました。

NPO法人勝山・町並み委員会の理事をされていて、「ひのき草木染め工房」店主の染織作家、加納容子さんにお話を聞きました。彼女は、東京の芸術大学で染織を学び、その後東京で織教室や作家活動をされた後、生家の造り酒屋を継ぐために地元に戻り家業を手伝いつつ作家活動をされていました。

最初のきっかけは14年前、自宅の造り酒屋の店頭に自作の暖簾を掲げたところ、隣近所の評判を呼び暖簾制作の依頼が続出したとのことでした。お店で日除けと人目避けのためにブラインドやカーテンを閉めると、店がお休みかと思われ、暖簾であればこのことが解決します。初め16件が集まり加納さんに制作を依頼して町に暖簾がかかると、新聞や雑誌で取り上げられる様になり、県下初の町並み保存地区の指定をされ、暖簾を見ようと観光客が増えたのです。また、朝夕の暖簾の出し入れが人々の会話の機会を生み出し、地域の人々のコミュニケーションが生まれました。加納さん達は暖簾の町を目指した訳ではなく、自分たちの暮らしのアイデアが暖簾をつくることになり、暖簾制作でできた住民間のコミュニケーションの深まりが、町おこしのきっかけとなったのです。布は劣化するので3年ごとに順繰りに新調しています。それにかかる費用は、自分たちの積み立てと行政も補助金政策で支援するなど大変協力的です。

今では100軒近くの人達が意匠を凝らした暖簾を掲げています。一枚として同じものはなく、古くから伝わる紋章のようなデザイン、家業を表すデザイン、モダンで抽象的なデザイン等、ユニークで各々の家のトレードマークになっていました。デザインの質の高さは、私が想像して